

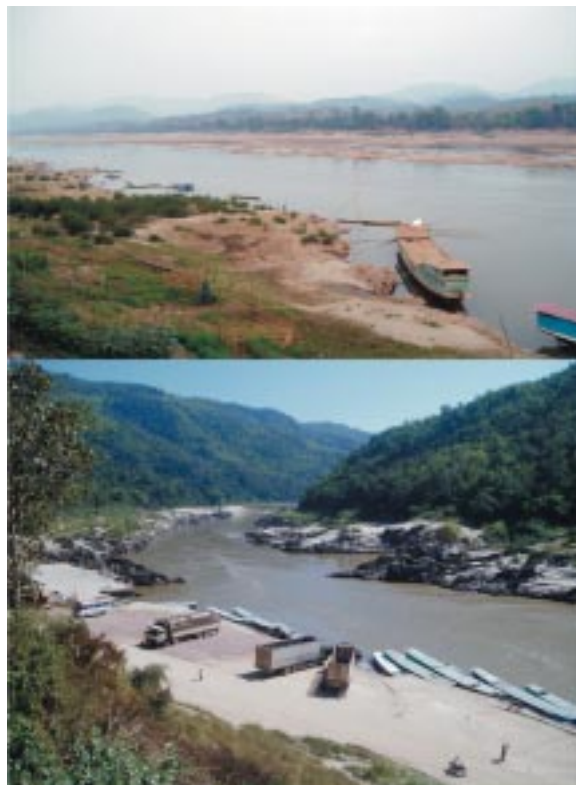
ラオスの地塊衝突テクトニクス

＜原 英俊・上野 勝美・鎌田 祥仁・一瀬めぐみ・久田健一郎＞

ラオスは、 Gondwana大陸から分離したインドチャイナ地塊とシブマス地塊が、三畳紀末に再び集積した地域にあたる。近年上野・久田(1999)などにより、タイ北部で提唱された新しい地帯構造区分をもとに、ラオスの地塊衝突テクトニクスについて紹介する。その地帯構造区分では、インドチャイナ地塊とシブマス地塊の間に、スコタイ帯(ペルム紀-三畳紀の島弧を起源とした地質体)とインタノン帯(パレオテチス起源の海洋性岩類を主体とした衝上地帯)が認められる。従来ナン-ウトラディ縫合帯がパレオテチスの収束域と捉えられ、インドチャイナ地塊・シブマス地塊の境界として考えられてきた(例えばMetcalf, 1999)。一方、新しい地帯構造区分では、両地塊の境界はある程度幅を持つ構造帯としてインタノン帯に求められる。そしてナン-ウトラディ縫合帯はインドチャイナ地塊とスコタイ帯との間に発達した背弧海盆の収束帯と考えられている。



1. タイ北部で提唱された新しい地帯構造区分、上野・久田(1999)を改変した、インドチャイナ地塊とシブマス地塊の間にスコタイ帯とインタノン帯が区分された。このうちラオス北部では、インドチャイナ地塊とスコタイ帯が分布する。



2. ラオスを流れるメコン。パクレイ周辺、乾期のため水位は低い(上)、パクベン周辺、今回の調査で唯一変成岩が露出していた(下)。地名は本文参照。



3. 褶曲を伴う石灰質タービダイト、炭酸塩プラットフォームの斜面に発達したタービダイトと考えられる。



4. 石灰質タービダイトのクローズアップ。級化構造が見られる。



5. 石灰岩礫岩. 炭酸塩プラットフォームの斜面に発達した土石流堆積物と考えられる.



6. 腕足類化石(ギガントプロダクタス?)を含む石灰岩. ギガントプロダクタスは, 前期石炭紀の示準化石として知られる. 殻が上方に凸に配列しており, これから地層の上下が判定出来る.



7. バンビエンの石灰岩露頭. バンビエンは風光明媚な地域で, バックパッカーの人気スポットとして知られる.



9. 溶結した玄武岩角礫岩(上). 玄武岩角礫岩は, 赤・緑・暗緑色を呈し強固に固結している. 白い角礫は石灰岩で, 玄武岩角礫岩に取り込まれている. 石灰岩礫のクローズアップ(下). 礫の周囲(約5mm)は, 方解石が再結晶化している. この礫にはフズリナ・有孔虫化石が認められることがある.



8. 枕状溶岩. 急冷周縁相が認められ, また発泡組織をよく残している.

